館

www.columnland.net

1号館

約束の館

「おばあちゃんはねえ、いつかこのお館で暮らすのよ」

その絵を眺めるとき、祖母はいつもそう言って笑っていた。祖父との仲があまり良くなく、俯きがちだった祖母の頬を、唯一緩ませることのできる絵。「約束の館」と題されたその絵は、僕が幼い頃から祖母の部屋に飾ってあった。当時こそ綺麗だと思って眺めていたものの、成長して美大に入学した後で見れば、遠近感も色彩もいまいちで、決して評価できるものではなかった。それでも、祖母を笑わせられるのはその絵だけで、僕がどんなに美しい絵を描いても、その絵を超えることはできないのだった。

結局、笑わせることができないまま祖母が亡くなって、二年が経過していた。館の絵はずっと、祖母の部屋だった場所に掛かっている。

そんな中で、その文章を見つけたのは偶然だった。引っ越すから不必要なものは捨ててね、と母に渡されたゴミ袋を持って、僕は久々に祖母の部屋へ入った。もうほとんど物が無い殺風景な部屋で、その絵はいつまでも存在感を放っている。祖母が亡くなって、この家には館を見て微笑む人もいなくなった。捨てようか、そう考えて、壁から額を外したとき、絵の裏が真白でないことを知ったのだ。

これは私と貴女との館だ。煌びやかではないが、洒落た装飾の付いた、立派な館だ。四季の花で彩られた庭がある。花が好きな貴女は、いつもその庭の中心で微笑んでいる。館の中には居心地の良い書斎があり、私はそこの窓から、花を愛でる貴女を見守っている。私に気付いた貴女は、その柔らかな唇で私の名を紡ぎ、こちらに手を振って笑うのだ。戦争が終わったら、この館を建てて貴女を迎えに行こう。時間はかかるが、必ず迎えに行こう。これは暖かくて優しい日々を、貴女と過ごす為の約束の館だ。

それは一人の男が残した、優しい嘘の記録だった。祖父とは違う筆跡は、おそらく祖母のかつての恋人のものだろう。彼は戦場に赴く前に、この絵を祖母に託したのだ。

そしてきっと、帰ってこなかったのだろう。

どう足掻いても、祖母にとってのこの絵を超えることができなかったということを、ようやく僕は理解した。祖父と結婚して、子供を授かって、孫も生まれて、祖母はそれでも、彼を待っていた。約束の館を信じていたのだ。

描かれた日から、六十年。散々馬鹿にしていたその絵を、僕は未だに、捨てられずにいる。

館の窓から、誰かが誰かに笑いかけているような気がした。

2号館

夜のかくれんぼ

人のいなくなった体育館で、僕はその子供に出会った。気配がするからいるだろうな、とは思っていた。体育館は真っ暗で、幽かな月明かりが差し込むだけだった。

「お兄ちゃん、だれ？」赤い服を着て、その胸には「風太」と書かれた名札を付けていた。

「僕？僕は探偵だよ。謎を解いたり、人を探したり。困ってる人を助ける仕事だね」

人を探す、と聞いて、その子供—風太くんは、嬉しそうにした。

「かくれんぼしよ！」と叫び風太くんはいなくなる。しばらくして、暗闇に紛れ、「もーいーよー」と声が聞こえた。

最初に、倉庫を探した。懐中電灯の明かりを頼りに、確認する。ここはない。次に、トイレの個室—の端にある、用具置場。ここにもない。

体育館は老朽化が進み、いつ事故が起こっても不思議ではない。実際、十年前に、児童一人がこの体育館でけがをする事故が起きた。改修工事の用具の下敷きとなったのだった。

体育館の舞台裏。他にあるとすればここだろう。そうして僕は、探していた物を見つけた。

体育館の舞台の二階—そこは、普段使われることはなく、登れないようになっている。しかしそこには、物を置くためのスペースがあり、工事の際に利用されることとなっている。

僕はそこに、先ほど見つけた鉄のはしごをかけ—倒れないように注意して、少しずつ登る。

舞台二階の物置—僕はそこで、風太くんを見つけた。擦り切れて、変色した赤い服と名札、それでも幽かに風太と読める。それらを身に付けた、白骨を。

懐中電灯を消す。すると風太くんが—白骨ではない、生きた当時の姿をした風太くんが、傍らに現れた。それを確認し、僕は話す。ここに来る前に調べた事実と推測を。

「十年前、この体育館で事故が起こった。かくれんぼをしていた女の子が鉄のはしごの下敷きになった。女の子は腕を折ったが命に別条はなかった。しかし、その夜、ほかの児童—三山風太くんが行方不明となっていることが、判明した。風太くんは、見つからなかった」

推測を確かめる質問をする。「はしごを倒したのは、君かい」

風太くんは凍りつき—小さく肯く。

かくれんぼをしていた風太くんは、舞台上に隠れた。工事のために用意された、はしごを使って。その時、はしごが倒れ、女の子がけがをした。

「あの後、先生がいっぱいきて…救急車もきて、でもぼくは、助けを呼ぶことができなかった。きっと、はしごを倒したことを怒られると思った」

風太くんは降りることも助けを求めることもできずに、二階に取り残された。女の子の事故のため、改修工事は中止され、風太くんの行方不明もあり、もともと生徒の少なかったその小学校は、廃校となった。そして風太くんは、自分を見つける人を、ずっと待っていた。

僕は「風太くん見つけた」と呟く。風太くんは安堵したように笑い、今度こそその姿を消す。

再び、懐中電灯の明かりをつける。一筋の光芒が、暗闇を切り裂く。探偵の仕事は終わった。体育館を出て、僕は警察へと仕事を委託する。電話取り出す僕は、幽かに、それでも確かに、「ありがとう」の言葉を聞いた。

3号館

館の夢

朝。五分寝坊したが、まあ支障はない。寝ぼけたまま支度を済ませ、通学路を歩き始めた。途中で友達を拾うはずだったが、んが出てきた。部活で先に行ったそうだ。

仕方なく一人で黙々と歩き、歩き続け、学校に着いた。でも、おかしい。学校、じゃない。館だ。幻覚か、と頭を叩いてみると頭上に何かが浮いているのに気づいた。それを掴んでみると、はてなマークだった。驚いて振り落とすと、それは直ぐに泡立って地面に溶けた。よく分からない。だが遅刻はまずいので屋敷の真正面にある扉から入ってみた。

「おはようございます。」

そう言って丁寧にお辞儀をしたのはクラスメイトの西園寺さん。メイド服を着ている。俺は生返事をしながら辺りを見回す。ワイン色の絨毯が敷き詰められ、突き当りにグニャグニャと曲がった階段、高い天井からは煌びやかなシャンデリアがぶら下がっていた。

「あのーここは・・」

「学校ですよ。ほら急いでください。」

あ、そうだった。教室に行かないと。なぜか階段の先に下駄箱があった。いやぁ良いモノ見たなぁと思いながら、上履きに履き替えて顔をあげると、目の前は学校の廊下だった。振り返ると一階からメイドが手を振っているので小さく返事をしておいた。

小走りで廊下を進み教室に身を滑り込ませたが誰もいなかった。時計はジャスト八時四十分。どうなっているんだ？

「ウオオオオオ！」

獣のような叫び声が掃除ロッカーから聞こえると、ドカンと大きな音をたててゴツイ担任が笑顔で登場した。

「HAHAHA！驚いたか！」

正直ドン引きなんですけど。しかも掃除ロッカーからクラスメイトがゾロゾロと、何人も出てくる。トリックを暴いてやろうロッカーを覗き込むと誰かに押し込まれ、出られない。奥に通路を見つけたので進む事にした。

最初は暗くて細いダクトが続いた。匍匐前進で進む姿はスパイ映画顔負けだ。時々天井の隙間から教室が見える。普通に授業をしているクラスもあれば、不良が殴りあいのショーをしている熱いクラスもあった。T字路を右に折れ、扉を蹴り開けると理科室の掃除ロッカーに出た。部屋は薄暗くエーテルの匂いが鼻につく。机の上に大きなガラス筒が薬液で満たされており、そこに浮かんでいる犬面猿がゴソゴソと動いている。

遠くの作業台のガラス筒が割れた。興奮した犬のような鳴き声と、薬液がポタポタと不気味に空気を震わせた。まずい。食われる。手元にあった放電実験用の銀色の玉をコンセントに繋いで出力最大でスタンガンとした。犬面猿が素早い動きで自分との距離を詰め、残り5メートルの所で飛びかかってきた。

「おらぁああ！くらえ化け物おお！！」

スタンガンもどきを振り上げて犬面猿に感電させると、うめき声を上げながら床に転がり絶命した。そのまま走って理科室を脱出し、走って走って、下駄箱が見えてきた。

メイド服の西園寺さんがこちらに走ってくる。その後ろにはさっき殺した犬面猿が二匹。

「伏せろっ」

そう言い捨てると彼女は手榴弾のピンを抜き後方へ転がした。

閃光と爆風で吹っ飛んで、目が覚めた。

まぁ、夢落ちなんですけどね

あ、西園寺さんカッコよかったお。

その灯り、危険につき

その夜、アメリカ海軍将校であるウィリアム・ヒースは客人として鹿鳴館に招待され、そして震撼した。

確かに館の装いは西洋の稚拙な模倣であり、ホストである日本人たちの振る舞いも酷いものであった。だが館を照らす電灯が、彼の心を大きく震わせた。その灯りは強く、揺らぐことなく輝き、高い技術力で造られた事を伺わせた。

白熱電灯の実用化は、アメリカでもつい最近成し遂げられた出来事だ。それをこうも短期間に、劣化ではなく完璧に再現してのける技術力。数十年前まで閉じこもっていた国としては考えられない、あまりにも異常なものであった。

――いったい、こいつらは何者なんだ？

その技術力が産み出し得る軍事力、そして何より得体の知れない物と相対しているという感覚が、彼を恐怖に包んだ。俺はいつものように、アジアの島国が我々に劣る事を確認しに来たはずだ。なのに、なんだこの国は。気味が悪い。恐ろしい。頭の中では警笛が鳴り響く。こいつらは、今までの国とは違う。

鹿鳴館に客人として招待された、各国の政治・軍事における重要人物。そのほとんどが同じ恐怖を感じ、それを気取らせないために、いや認めたくないために、口を揃えてダンスとテーブルマナーの滑稽さを嘲笑ってみせ、帰国すると直ぐさま日本の特殊性、危険性を広めた。

明治二十年、外国人接待所として造られた鹿鳴館に、日本初の電灯が灯された。日本の先進化アピールという鹿鳴館の役割はその電灯によって為され、十分すぎる効果を上げた。日本の異常さに脅威を感じた先進諸国は、これ以降、徐々に徐々に警戒心と不信感を高めていく。ロシアの敗戦によってますます高まった不安は第一次大戦を経ても消えることはなく、後の第二次大戦にまで繋がっていく事となる。

5号館

僕は今、一人呆然と立ち尽くしている。というのも、いつも赤坂の家までの帰路として使っていた道の上に、謎の館がどっしりと構えていたからだった。昨日までは何もなかった道の上に館があるなんてのも不思議な話だったが、確かにそこにそれはあった。

それにしてもなんて巨大な館なのだろう。左も右も外壁に終わりが見えない。早く家の帰らないとお気に入りのアニメ番組が終わってしまうってんだから大変だ。しかたなしに僕は館の正面玄関のドアを叩いてみた。すると突然ドアが開き、館の中の老婆の姿が確認できた。

「ようこそ回文の館へ。館長の今井舞と申します。」

「あっどうも。僕、小久保。」

「この館を通り抜けたいのでしょう?そのためには私めと回文勝負をして、勝たなければなりませんぞ。」

頭が痛くなってきた。回文?勝負?しかしアニメの時間が刻一刻と迫っていた。残された道はひとつしかない。

「分かりました。受けて立ちましょう。」

「では私めからとしましょう。私めが言った後でそなたが私めのよりもすばらしい回文を披露した場合、そなたの勝ちとなります。では行きますぞ。『世の中ね、顔かお金かなのよ。』!」

「・・・」

そんな意外な回文がくると思ってなかった僕は呆然としてしまった。意外や意外。そんな回文をこの老婆が言うなんて誰が予想できただろうか。

「どうしたのじゃ?私めの回文にはさすがに敵わぬだろう。」

その時、ふと例のアニメの主人公の必殺技を思い出した。これしかない。

「ええいこれでもくらえ。『チンパンジイ怪人パンチ!』」

あまりの衝撃だったのか、老婆の頭からかつらが落下した。

「・・・なんという回文じゃ。私負けましたわ。好きに通るが良いわい。」

気づくと館は消え、元の道が続いていた。いったいなんだったんだろう?おかしな夢でも見てたのかな。そう思いながら時計に目をやった。まずい、時間がない。必死で僕は家まで走った。放送開始１０秒前、何とか家に着いた僕は玄関のドアを開け、家に飛び込んだ。僕の必死の形相を見た母がこう言ったのは言うまでもない。

「『この子怖いわ!ここの子?』」

6号館

最期の涙

「おはようエリザベス、今日も君は美しいね。ああ、動いては身体に毒だ。子供たちの世話は私がするから安心しなさい」

旦那様は腕の良い蝋職人でございました。かつての工房には引きも切らずに注文が舞い込みました。あるとき、さる高貴なご婦人が旦那様の作品をいたくお気に召され、郊外のこの館を賜ったのです。

「ヴィクトリア、早起きさんだね。おやおや、服が汚れているね、猫の仕業かい？パパがきれいにしてあげよう」

大変な愛妻家だった旦那様は、病気がちの奥様を静養させることができるとお喜びになりました。そして、奥様の病を癒すため、八方に手を尽くしました。しかし、美しい奥様には天使も見惚れたのでしょう、儚げな命の蝋燭は吹き消されてしまいました。

「ジョージ！猫に転ばされたのか、ああ可哀想に！偉いぞ、泣かなかったんだね。病気のママを支えてあげられる強い子になるんだぞ」

おいたわしや、旦那様は悲嘆に暮れ、地下室に奥様のご遺体を安置し、埋葬を拒み続けました。そしてひと月が過ぎた頃、お気付きになったのです。奥様が、美しいお姿を保ち続けている――屍蝋化と申すのだそうです――そのことに。

「みんな、グッドニュースだ！新しい家族がこの館にやってくるぞ！エドワードだ！目元が君によく似ていると思わないかい、エリザベス？」

神が旦那様を哀れみ、奥様を遺してくださったのだと思いました。旦那様はしばらくぶりの笑顔で奥様にキスなさると、工房の竈に火を灯しました。そして絹のような光沢を放つ蝋を、丁寧に丁寧に奥様へお着せになりました。

「蝋が足りなくなりそうだ。ちょっとロンドンまで行ってくるよ。いい子にして待っているんだぞ、エドワード」

それから旦那様は、見目麗しい子供を連れてきては、奥様と同じように蝋の衣を纏わせ、家族と呼びました。私に旦那様をお慰めする術はなく、ただお坊ちゃま、お嬢様方のお相手をするばかりでした。

「――ごほっ、なんだこの煙は！エリザベス、ヴィクトリア、ジョージ、アン、ジョン、メアリー、君たちは無事か！？」

でもそれも今日で終わり。眠らされていたエドワードという子は、私に噛まれて飛び起き、その辺にあるものを皆ひっくり返しながら逃げて行きました。倒れた燭台から火はあっという間に燃え拡がって、私が蝋人形館と呼ぶこの館は今、業火に抱かれています。

「エリザベス、ああ、なぜ君は泣いているんだい？早く逃げなければいけないよ。子供たちは皆元気だから自分で出て行けるさ。君は、君は笑っていておくれ。そうでないと私は――」

奥様の蝋は融け、まるで涙のように一筋の雫が頬を伝っていました。旦那様の犯した罪を悲しむように、終焉を喜ぶように。

「そうか、最初からこうすればよかったんだ――今往くよ、エリザベス」

旦那様も身罷り、館もやがて崩れるでしょう。そろそろお暇させていただきます。私？名も無き老猫でございますよ。

7号館

とある館のお嬢様たちと執事

きれいな湖の畔に館がありました。そこに、二人のお嬢様のレイラとレミと、彼女たちに仕える執事のチャジィがいました。

太陽が輝くお昼頃、一人の少女がベランダで読書をしていたとき、
「お嬢様、コーヒーのお時間です。」
「ありがとうございます、チャジィ。ところで、思いましたのですけど。」
「何でしょうか？」
「レミってかわいそうですよね。」
「それはなぜでしょうか？」
「だって、レミって吸血鬼でしょう。吸血鬼って、太陽にさらされると灰になってしまいます。一生太陽を拝められないですから。」

月と星が輝く真夜中、一人の少女がベランダで読書をしていたとき、
「お嬢様、紅茶のお時間です。」
「ありがと、チャジィ。ところで、思ったんだけど。」
「何でしょうか？」
「レイラってかわいそうよね。」
「それはなぜでしょうか？」
「だって、レイラって人間じゃない。昼に起きていたら、夜には寝てしまう。こんなにきれいな夜空を見られないじゃない。」

夜明けごろ、レミが眠りに行ったころ。チャジィはこう思いました。
「私はロボットですし、バッテリーはずっと切れないそうですので、太陽も拝められ、夜空も楽しめます。レイラ様、レミ様、申し訳ございません。しかし、ずっと、レイラ様とレミ様にずっと仕えることができて、私は本当に幸せでございます。」

8号館

青一色の背景の中をカモメ達が行き乗する――
停泊所にはまだ行き先を確認していないまま予約してしまった一隻のフェリー
俺は乗船手続きをさっと済ませてフェリーに乗り込み――
『そいつ』と出会った。

～自分探しの旅の果て～

「こんにちは」
「あ？　ん？？　あ～　えっと　……こんにちは　でいいのか？」
デッキで魂が抜けたかのようにぼんやり海を眺めていた俺の耳をイレギュラーな音波が貫いた。あわてて振り返ると、そこにいたのはの俺と同年代、もしくは少し年上かそのくらいの女性。つまり期待して裏切られる展開の匂い。
「貴方その恰好であの島に何しに行くの？見たところバカンスじゃないみたいね。」
どうやらこのフェリーの行き先はリゾート地らしい。確認しなかったのはまずかったか？
「いや　ちょっと自分探しの旅をね。」
期待して後で裏切られるくらいなら今離れてもらおうと、確実に引かれるであろう言葉を選ぶ。
「あら　私と一緒なのね」
いや　あろうことか食いついてきた。つまり普通の女性ではない。俺はそれに少し安心した。
それからしばらく話しこんで　ひと段落が付き、俺は再び海を見下ろす。
「……ねぇ　貴方が今何考えてるか　当ててみようか？」
「ん？」
他愛のない会話の続きだと思って生返事を返す
「――ここから飛び降りても死ぬかどうかわからない上に家族にも乗組員にも多大な迷惑かけることになるな……」
背筋が凍りついた。まるで妖怪に心を読まれているかのような感覚。
俺が『自殺志願者』であることが　見破られた。
「なっ　えっ！？　あ？」
まともな言語が喉を通ってこない。
「あ　だいじょうぶだよ　特段気づかれやすい素振りでもないし、私がちょっとおかしいだけだから。」
彼女は寂しそうに言うが、とりあえず俺は言葉が出ない。
その後島に着くまで俺の口から言語と認識される音声が放たれることはなかった。
「俺なんかとっとと死んでしまえ　消えろ　ずっとそんなことばかり考えてた。」

俺の言動、行動は　自分が気付かないうちに人を不快にさせてきた　それはどれだけ気をつけても直すことができなくて　いつしか俺はその努力を放棄してしまった。おそらく、自分への殺意が芽生えたとき。
「……」
「でも　自殺をするとなると普通に考えつく方法ではどうやっても人に迷惑がかかる。今回はどうやれば人に迷惑をかけずに死ねるか考えるための旅　という名目で問題から目を背ける時間を作っただけ。」
「……この島　奥の方に洋館があるんだけど、行ってみようか？」
「突然何を？」
脈絡のない、しかも現実味を帯びていない彼女の言葉が俺の思考を侵食する。もう、夢か現実かをどうでもよくさせる。
「ついてきて……」
深緑の森の中　現実から夢の中への道を歩いたのではないかという感覚に苛まれながら俺は巨大な洋館を目の当たりにする。
「貴方が探している方法　一番楽なのは――」
俺には彼女が次に何を言うのか予測できた。この洋館が何なのか　彼女が何者なのかも　理解出来た。
彼女の言葉が　現実から離脱して　ようやく気づいた。
存在しなかったこと。にすればいい。
死んでも誰も悲しまない　いなくなっても誰も探さない
「――この館で　孤独死すること」
この洋館に入った人間は　外界では存在しないことになるのだという。彼女はバカンス中、そんな館に迷いこんでしまった。そして、出る方法をずっと探しているうちに力尽き死亡。幽霊となって　今まで自分をずっと探し続けていた。
「やっと　見つけたよ――」
彼女は、自分のいる館の中に入っていこうとする。彼女についていけば、俺は誰にも気づかれることなく　この世界を去れる。
「あなたは　どうするの？」
それでも俺は　その選択肢を選べるはずがなかった。
誰にも　じゃなかったから。俺がそれを選択したとき　苦しむであろう人が目の前にいたから。
「俺は――」

「うん……　ありがとう――」
彼女は満面の笑みで　そっと館の中に消えていった。

気がつくと俺は　なぜか見知らぬ森の中に眠っていた。

相変わらず、俺の言動や行動で人を不快にしてしまうことばかり。しかし、俺は過去、いつ、どこだったかは覚えていないけどとても大事な場面で、それを回避したことがある。
そんな不思議な記憶を抱えながら生きている今日この頃。

9号館

ただ一人の来館者。

孤独を感じながら暮らしていた一人の老婆。

古くなった家も寂しさを感じさせる。
ふう、と一息ついてから重い腰を持ち上げた。先日旅立ってしまった夫の部屋にもそろそろ新しい風を吹き込んでやらねばならない。最近は怠りがちであったが、久し振りに本腰を入れて主婦の仕事をこなす。
もう部屋に夫の温もりは感じなかった。無心に作業は進められていく。

夫の本棚の奥には妻の知らない埃をかぶった一冊の大きな本があった。気がつくともう始めのページに彼女の視線は落とされていた。アルバムのようだった。そこには生前の彼が、自らが始めた美術館の入口前で満面の笑みを浮かべ立っていた。小さく地味なものであったが、彼がその一身を生涯にわたって捧げた美術館である。夢を追う夫とそれに連れ添う妻。そんな若い自分たちの姿がよみがえってくる。ページをめくるとそこには写真ではなく絵画が貼られていた。隅には小さく、風景画家でもある彼のサインがあった。彼女はその絵の人物が若い頃の自分であると気がついた。そこに彼の絵はひとつもなく、何十ものページに自分の寝顔や旅先で笑う自分の姿ばかりが飾られていた。後半の絵には年を帯びた私の姿が描かれていた。彼の人物画を初めて見た妻は大いに驚き、同時に今まで抑えていた夫への想いと孤独が爆発した。彼女しか描かれていなくとも、一枚一枚には二人の思い出が滲み出ていた。目からは大粒の涙があふれ、手は小刻みに震えた。彼の後を追うという考えが一瞬の間、孤独な老婆の頭を支配したが、最後のページをめくるとそれはかき消された。

また、ご来館ください。

長い間ありがとう。

夫からプレゼントされた小さな美術館。彼女は夫が愛した美術館を再び開くことに決めた。彼女の新しく忙しい暮らしが始まる。毎日、2つの美術館に通うのだ。彼に対する孤独は消えないが、もう自分を一人だとは思わなかった。

――掃除された部屋には、新しい風が吹き込んでいた。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	約束の館	5 pt	5 位	2 sp
		ひとりの女性が生涯たいせつに守り抜いたもの。それを「絵」というカタチに集約して、くっきり見せていただきました。「優しい嘘」という言葉が、戦争をひきずって、とても重たい余韻です。 ひとは何を宝物として生きていくのかな、しばし考え込んでしまいました。 ラスト作品と響き合って、ブロンズ・メダルでしたね、おめでとう！ 特別賞：おじいちゃんの人生は何だったんで賞 from B館班（おばあちゃんはともかく、おじいちゃんがかわいそうすぎます。） 死亡フラグで賞 from 開館班（その台詞は言っちゃダメだ！）		
02	夜のかくれんぼ	6 pt	4 位	2 sp
		体育館２階の子供の白骨。悲しいね。その悲しみをしっかり響かせつつストーリーを立てていて、しっとりと読めます。ラストの余韻も風を感じさせてすばらしい。 それにしても、この探偵さん、どんな依頼を受けて、どうやって真相にたどり着いたのでしょう。そんなバックグラウンドがちょっとだけでも点描されていると、よりストーリーがしっかり着地するのでは。 特別賞：一番の謎で賞 from マクロスF班（謎だらけ。） なんで「風太君」なんで賞か？ from ドラえもん班		
03	館の夢	0 pt	9 位	2 sp
		西園寺さんすてき☆ 学校の夢って、ほんと出現頻度高いですよね。それをこうもゴージャスに彩って、うん、こんな夢なら毎晩みたいかも。 気持ち良さそうに妄想してる、その気持ち良さがそのまま読み手にも伝わってきます。 お庭の大きさはゼロエーカーだったけど、イチオシフレーズ大賞ゲットです、おめでとう！ 特別賞：謎の魔物「ん」賞 from House of the Dead班（「ん」とは全てを終わらせる禁断の文字。夢ならこんな恐ろしい怪物が出るのもあり） 化学を勉強しま賞 from H館班（エーテルは引火して爆発するから） イチオシフレーズ：「まあ、夢落ちなんですけどね」×３ 「んが出てきた」 「あ、西園寺さん、カッコよかったお。」		
04	その灯り、危険につき	11 pt	2 位	1 sp
		鹿鳴館。着眼のユニークさとともに、豆知識（？）をストーリー仕立てにして伝えたところがグッジョブ！でした。 技術力アピールでこの場の読者層を狙うなんて、まあ何ともニクい布石です。 でも、この口車にダマされないでね。あっけらかんと		

		フィクションだそうで。 おめでとうシルバー・メダル!! 特別賞：一生を二度生きたで賞 from Castle班（NHKのドキュメントみたいで面白かった）		
05	無題（回文）	3 pt	6 位	2 sp
		この長さならタイトルほしいかな、もちろん回文で。 白熱対決！ のはずが、どこかまったりした書き味がいいですね。 回文そのものは、かなりの部分がみんなにとって既知なんでしょうけれど、機知が効いてます。 細かな仕掛けにも凝っていただいて、最多特別賞ゲットです、おめでとう！ 特別賞：たけやぶやけた賞 from A館班（頑張って回文考えましたね） 西５号館はデカイで賞 from 大日本帝国万歳班（回文よくがんばった） リサイクル可能で賞 from Western style buildinG班 （やはり金ですね） イチオシフレーズ：「世の中ね、顔かお金かなのよ」×２		
06	最期の涙	7 pt	3 位	0 sp
		エリザベスの涙のシーンがとてもうつくしい。 映画化できそうな、ドラマティックで悲しい展開です。 それにしてもストーリー展開の鍵を握っちゃうなんて、スーパー猫ちゃんですね。こんなに名前マニアのご主人さまが「猫」はただの「猫」なんて、冷たいこと。だから復讐されちゃったんですね、きっと。 定番の「マッド夫、妻恋しさに・・・」モノがスーパー猫ちゃんのおかげでブレイクして、ブロンズ・メダルです、おめでとう！ イチオシフレーズ：「おはようエリザベス」		
07	とある館のお嬢様たちと執事	1 pt	8 位	0 sp
		重量級が並んだ今回、箸休め的なごみポイントでした。 描写がないのにセリフだけで、金髪巻き毛にフリルのドレスのお嬢様がたが見えてきます。 でもって、この子たち、この先どうなるんでしょう？		
08	自分探しの旅の果て	3 pt	6 位	0 sp
		ファンタジックできれいなストーリー。長いけれど、さっくりと読みやすい。 自殺願望さんには、前回Qの8番作品をどうぞ。 それにしてもラストが謎だなあ。記憶していないなら、このストーリー自体の語り手さんはどなたなんでしょう。そこはお約束、って言っちゃいけない気が。		
09	ただ一人の来館者。	18 pt	1 位	0 sp
		あらたな伝説、新型インフルは名作を生み出す!? 奇しくも表紙に呼応するような裏表紙となりました。 アルバム写真よりも、もっともっと夫の妻を見つめる視線が集約された「絵」。亡き夫を慕う気持ちが、「長い間ありがとう。」に着地するまでの気持ちの動きもていねいにフォローされて、感動のストライクゾーンどまんなかです。 一つだけ。「老婆」という言葉が、ちょっとどうだったかな。侮蔑的な意味合いで使われやすい言葉なの		

		で。「老婦人」でよろしいのでは？ 何はともあれ、ダブルスコア近い圧勝のゴールド・メダルでした、おめでとう!!! イチオシフレーズ：「また、ご来館ください。」×２